

3

特集2 更年期障害のケア—心身ともに美しく—

更年期の関節変化： ヘバーデン結節など

岩瀬嘉志

順天堂大学医学部附属順天堂東京江東高齢者医療センター 整形外科 科長

更年期に発症する変形性関節症として知られるものに変形性膝関節症、Heberden（ヘバーデン）結節とBouchard（ブシャル）結節、母指CM関節症がある。これらはいずれも関節軟骨の菲薄化に始まり次第に関節の形態変形をきたす。このうち手指関節に発症するヘバーデン結節とブシャル結節は炎症期が数か月から数年続き、その間疼痛に対して対症療法が行われるが、その後は比較的日常生活に支障なく経過することが多い。一方、母指CM関節症は疼痛期間が長く強いことが多く手術治療もよく行われる。変形性膝関節症も主訴は疼痛で、治療は症状に応じて運動療法、薬物療法、手術治療が行われる。整形外科における関節症の治療は疼痛軽減、機能回復に重点が置かれているが、手指に関しては患者が医療機関を受診する目的が整容上の理由であることも多く、高齢化社会の進行に伴い今後見直さなければならない分野と考える。

更年期の関節変化

更年期に経年的退行変性が原因で発症する変形性関節症（geriatric osteoarthritis）として変形性膝関節症、手指変形性関節症がよく知られている。手指変形性関節症には遠位指節関節（distal interphalangeal joint；DIP関節）に生じるHeberden（ヘバーデン）結節と近位指節関節（proximal interphalangeal joint；PIP関節）に生じるBouchard（ブシャル）結節、母指中手手根関節（carpometacarpal joint；母指CM関節）に生じる母指CM関節症がある。

更年期に発症する変形性関節症はいずれも関節軟骨の

退行変性に伴うもので、関節の緩衝材と潤滑材の役割を果たしている軟骨の菲薄化に始まる。進行すると次第に関節軟骨を支える軟骨下骨の骨硬化が起こり、やがて関節辺縁に骨棘と呼ばれる骨の突出が生じ関節の形態自体が変形をきたす。手指変形性関節症末期には、軟骨が完全に消失して関節を挟んだ骨が癒合する骨性強直に至ることもある。変形性関節症の根本治療は軟骨の再生、機能回復が必要であるが、いまだ軟骨を再生させる方法はなく、現在行われている変形性関節症に対する主な治療の運動療法、薬物療法はいずれも対症療法といえる。

一般に変形性関節症の初発症状は腫脹疼痛であり、これは変形の進行に先立ち関節炎が発症するためと考えられているが詳しい機序はいまだ不明のことが多い。整形外

科における関節症の治療は疼痛軽減と、関節可動域拡大の機能回復に重点が置かれ、整容上の改善については重視されないことが多い。しかし退行変性変形性関節症が女性に多く発症することもあり、患者が医療機関を受診する目的は整容上の理由であることも多い。高齢化社会の進行に伴い今後益々増加すると考えられる更年期変形性関節症の治療において、整容上の改善も改めて見直さなければならない分野である。

ヘバーデン結節

手指の変形性関節症で最も多いのはヘバーデン結節である。50代の更年期に多く発症し、関節の腫脹疼痛といった初発症状で気づき整形外科を受診することが多い¹⁾。しかし多くは炎症期と呼ばれる有痛期が数か月から数年続き、その後自然消退することも多く、いつしか医療機関に通院しなくなってしまう。診断はDIP関節の特徴的な腫脹、変形(図1A)と単純X線像で関節症変化(図1B)を認める

A ヘバーデン結節の外見所見



B ヘバーデン結節の単純X線像



図1 ヘバーデン結節

A：DIP関節の腫脹と屈曲変形を認める。

B：両手示指のDIP関節の関節裂隙の狭小化と両手中指のDIP関節の関節破壊、屈曲変形を認める。